

令和5年度 太田市美術館・図書館運営委員会 摘録

◆日時 令和5年11月14日（火）午後1時30分～午後3時30分

◆会場 太田市美術館・図書館 3階視聴覚ホール

◆出席者

【委員】 尾崎委員長（オンライン）、川上委員、杉浦委員（オンライン）、染谷委員、鳥塚委員
（欠席：花井委員、森委員）

【事務局】 高橋館長、小林館長補佐（管理係長）、瀬古係長（学芸係長）、岡村係長代理、
山田係長代理、増田主任、矢ヶ崎主任学芸員

◆議題 ①令和4年度事業報告及び令和5年度事業報告（中間）について
②令和6年度事業計画について
③その他

◆配布資料

- ・ 会議次第
- ・ 委員名簿
- ・ （資料1）令和4年度・令和5年度（中間）太田市美術館・図書館事業報告
- ・ （別冊1）「なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』」事業報告書
- ・ （別冊2）「中村節也展—リンゴは卓上に、魚は水中に、家は地上に」事業報告書
- ・ （別冊3）令和5年度図書館イベント報告書
- ・ （資料2）令和6年度太田市美術館・図書館事業計画（案）
- ・ （資料3）令和6年度美術館・図書館事業カレンダー（案）

◆会議の内容

1. 開会
2. 挨拶
3. 議題

議題① 令和4年度事業報告及び令和5年度事業報告（中間）について

事務局が資料1、別冊1、別冊2、別冊3に基づき説明を行った。

（委員）

図書購入費の予算について、令和3年から令和5年を見ると、100万円とまではいかないが減額されている。太田市には他の図書館もあるので、すべてが同じというわけにはいかないと思うが、何か理由があるのか。

（事務局）

図書の購入費について減額となっているが、来年度はお客様のリクエストや選書方針に合わせた定期購入、レファレンスの図録、図鑑等の購入を考えており、要求としては今年度より増額になる見込み。要求の結果は、市全体の予算を見てこれからになる。

（委員）

今回の議題には令和4年度の報告も一部含まれていて、それと内容がかぶっていたら申し訳ないが、ポローニャの展覧会が前回で最後になり、今後継続できない理由は納得している。その上で、報告か感想をいただけたらと思う。

(事務局)

絵本原画は、子どもから大人まで広く親しみを持たれている媒体であり、期待値も高い。ポローニャ展の入選者は70名以上。絵本として完成していなくても応募可能なコンクールの受賞作品展であるため、物語の内容を知りたいという声アンケートであがっていた。そのため全作家に、あらすじを尋ね、回答のあった作家の作品に限り、ギャラリートーク等でお伝えしていた。このことから、物語と視覚芸術の融合を観覧者が楽しんでいると感じていた。当館が図書館と美術館の複合施設であるということも考えても、今後も絵本原画を取り上げていくことは非常に大事なことだと思っている。そのため、今年度も絵本原画を取り上げた美術展を準備中である。

(委員)

読書感想文の書き方ワークショップというのをすこし教えていただきたい。2時間の中で、1冊の本を選んで感想文を仕上げるという想定なのか。これは普通に行われていることなのか。

(委員)

私の方でこれは進めさせていただいているが、小学校1、2年生の子どものことを考えると、長時間にわたって読書感想文に関わらせていこうとすると、とても無理がある。それで本嫌いになってしまうのが、一番あってはならないと思っている。私も長く小学校に勤めて、退職してから国語を中心に各学校で授業を進めていた。その中でいろいろ考え、東京の先進の学校等にも行った。短い時間で親御さんと子どもがケンカしないで、泣かないで書ける方法はないかと考え、たどり着いたのが2時間で大体書くという方法だった。

選書が親御さんにとっては一番難しい。何でもいから書いて、ではなくて子どもと話をしながら、興味があるものとかこういうことをしたいとか、選書に自分たちも関わっていきたいということが1つ。

読書感想文は本来4年生で授業で行う。それを1、2年生に書いていただくのは大変なので、保護者の方にも来ていただき、保護者の協力を得ている。子どもはしゃべれるが、それはなかなか文にならない。おうちの人と話をして、しゃべったことを書き取ってください、というお願いを保護者の方にしている。

子どもが親御さんと話したことを、原稿用紙に書いていきましょう。構成についても、ある程度教科書にこの本を読んだきっかけなどが出ているので、その枠の中で書いていきましょう。ということにすると、子どもがあまり嫌がらず、保護者の方にも負担にならない。とてもいいのが、親と子で1冊の本について語り合いながら感想をまとめていけるということ。最後まで書き終わらない親子もあるが、3分の1くらいの子は書き終わるところまでいく。

(委員)

長さはどのくらいか。

(委員)

800字以内になる。読書感想文コンクールの規定が800字以内ということなので、その中で書けるように最初のところは200文字くらいで書きましょう、とある程度の目安を話すと、家の人もなんとなく見通しが持てて、子どもにもアドバイスができる。

そして、私ともう一人指導助言できる担当がいるので、困ったらすぐ声をかけてくださいということで作る。どうにか半分はみんな書けているかな。あとは家で続きをやってください。ただし、ここでやったものをそのまま出しても、読書感想文コンクールで入賞するとかいうことはありません。もしそういうのを希望するのだったら、家でこのあと3回4回推敲をしてください。ということをお話をしているが、雰囲気がとてもいいので、2時間というのはよかったかと思っている。

(委員)

読書感想文は毎回好評のようなので、ぜひ続けていただければと思う。

(委員)

確認したいのが、数値的な定量的評価と、定性的評価の両方があるが、それは両方ともできればあった方がいいと思う。目標設定がはっきり見えないが、いまどのようにしているのか。例えば展覧会だと、目標入場者数などを設定されてるかどうかを知りたい。

(事務局)

目標入場者数だが、その展覧会ごとと他の視聴覚事業等についても、目標人数は設定している。

(委員)

資料に書いてあるか。

(事務局)

こちらの報告書の中には記載してない。

(委員)

書いていない理由は何があるか。

(事務局)

これまで記載はしていなかったが、美術展観覧者数のところに今後は記載したい。

(委員)

他でも評価委員などをやっているが、予算が厳しくなってくると、議会などで目標や目標入場者数をどこまで達成できているかを絶対聞かれてしまう。そのため、特に理由なく記載していなかったのであれば、最初から準備しておいた方がいいと思うし、それがいい結果であればどんどん出した方がいい。とりあえず、まずはデータを取っておいて、次に活かした方がいいと思う。

ちなみに目標をどのくらい達成しているか。例えば入場者数ではいかがか。

(事務局)

中村節也展については、目標人数が2000人のところを実績が2210人だった。なむはむだはむ展の目標人数が3000人。

(委員)

実績が3569人なので、目標人数を超えている。

(事務局)

トライノアシオト展が目標2000人のところ1821人だった。

ポローニャ展については、3000人の目標のところ1714人だった。目標設定については参考となる美術展をもとに、展覧会ごとに数値を決定している。

(委員)

設定は難しいと思うが、ここでお伝えしたいのは、目標を達成できたか達成できていないか、ということ言いたいのではなくて、結果を次に活かすためにデータをどう読み取っていくか、が重要だと思うということである。PDCAで考えると、C(評価)があつてのA(次の取り組み)になると思う。そのあたりの意識をしっかりと持っておくと、何かあった時のために「備えあれば憂いなし」になると思う。

目標を超えているところは、せっかくなのでなぜ超えたのかを検証したらいいかと思うし、もし設定を超えなかったら、設定が間違っていたのか、それとも何か方策が取れたのか、というところを、展示が終わったあとに振り返って、次にいく、ということかと思う。うまくいっている時は何も言われなくても、何か難しくなってくると必ず言われることなので、リスクヘッジの意味でぜひにと思う。

あともう1点、1日あたりの来場者数を入れていただきたい。総来場者数を開館日数で割れば出てくる。評価する際にいつもそこを見ている。会期が短い場合は、当然総来場者数も少なくなるので、有用な指標として1日あたりの来場者数を知りたい。計算するとやはりポローニャ展が1日66人で一番多いけれども、さきほどの全体的な目標設定からすると目標の半分くらいだった。そのズレみたいな

ところは非常に興味深いなと思っている。粗探しでは全然なく、客観的になぜそうなのかを見たいと思ったし、今後見せていただきたいと思う。

同様に図書館の方も、総来場者数や貸出数を、市内のほかの同規模図書館や、他市町村で同規模の公立図書館と比較していただけると、データをどうとらえたらいいのかがわかるかなと思った。美術館のことは大体わかるが、図書館は専門外でわからないので。数だけで判断する、ということは絶対はないが、数はすごく重要だと考えている。定量・定性両方でバックアップを取っておきたい。そうした資料を次回見せていただけたらと思う。

もう1点思ったのが高校生へのアプローチである。これについては前にもお話したかと思うが、ここにぜひともかなりの力を入れていただけたらと思う。なぜかというと、卒業した高校生と太田市とのつながりの創出が重要だと考えるためである。太田市外もしくは群馬県外に出る高校生の割合がどのくらいかわからないが、高校生たちが何らかの形で太田に戻ってくるような道筋を、美術館・図書館がフラッグシップになって作ることができる、と思っている。太田市美術館・図書館は、日常的に高校生に親しまれ、高校生が勉強したり喋ったりしててすごくいいなと思う。さっき何かの資料で高校生の来場者数がポンって出てきたが、年間の美術館来場者数の4倍くらいあったような気がした。どこにあったかがはっきりわからなかったが、例えばなむはむだはむ展だけに来ている高校生の数が、その時に館全体で来館している高校生の数と比べると少ないような感じがあったかなと。

実際、来館する高校生の何パーセントが美術館に入っているのか。

(事務局)

まず順を追っていくと、美術展の来場者数の目標はある。出し惜しみをしているわけではなかったがご指摘の通りかと思う。次回から表記できるようにしたい。

来場者数目標値についてはすこし難しい状況があって、コロナ以降また状況が変わってきている。来場者数が大きく減った。そこからどう持ち直しているのかを慎重に考えなければいけないので、目標を達成できているできていないということが出てきてしまうかと思う。

(委員)

その点は気にしておらず、太田市美術館・図書館に来館した高校生の何人が美術館に入っているかを知りたい。

(事務局)

美術展は高校生以下を無料にしているので、高校生以下の人数はカウントしているが、高校生だけの数字というのは取っていない。そこは考えさせていただきたいと思う。

(委員)

なんらかの方策が取れるとよいと思う。なぜかというと、高校生にインプットすると将来につながるという観点から、高校生が重要だと思っているためである。

小学生も重要だが、小学生から高校生になるまで、ずっと美術館・図書館の接点を作っていくつつ、しかしながら高校卒業後に太田を離れるという状況になった時に、また美術館・図書館に行きたいなと思ってほしい。また、実家に戻った時、太田に残って子育てする時になったら、美術館・図書館に行きたいなとか。人生が大きく変わる時期である高校時代に、美術館・図書館の存在をインプットしておきたい。通常は受験などで美術館から一番遠くなる時期だが、太田の美術館・図書館は受験生も勉強や遊びに来たりしているし、なにより無料だということがある。なので、私の思いとしては太田の美術館・図書館に来た高校生全員が美術館のフロアに入る、という目標設定をして、何パーセント達成できるかというところを見たい。なぜここまで言うかということ、高校生の入館が無料だからである。「トイレに行くように美術館に入ってほしい」という思いがあり、太田でそれができるといいなと思っているのを改めてお伝えしたい。

全国、そして全世界の美術館の傾向を見た時に、やはりいま、乳幼児、そして高校生くらいまでのターゲットに一番注力している。特にイギリスとかアメリカ、フランスなどがそうだが、太田ならオペレーションも含め、できるんじゃないかなと思っている。

もう1個、高校生でいうと、先ほどお話があった感想文ワークショップ。これも前にお伝えした気もするが、中高生、特に高校生に文章表現の楽しさとか面白さと、入試で小論文を書くことを合体させるようなプログラムを、小学校にプラスして先生方にやっていただけないかな、といまお話を聞いていて改めて思った。小学生に呼び込みをするよりも高校生の方が難しいのは十分にわかっているが、

太田の美術館・図書館はほかに比べて本当に高校生が来ている、また来やすい、というのを感じている。そこを強く今回お伝えしたい。

(事務局)

美術展に関しては入場時に対面の受付があるので、対面で確認を取れば高校生の人数を把握することはできるが、来館者のうちの高校生が何人かは、出入り自由なためにカウントするのは無理になる。勉強をするスペースがあるので、高校生の来館が多いのは確か。美術展に入る人がどのくらいいるかというと、これは圧倒的に勉強で来る方が多いかと思う。その辺で、では大体何割くらいが…ということになっていくが、工夫してどういう方法ができるか検討させていただきたいと思う。

(委員)

市民の方たちにお伝えする時、何かあった時、ということが常に頭にある。高齢の方たちのための福祉も大変重要だと思うけれども、これからの太田市のことを考える時に、青少年に対するアプローチをどれだけやっているのかは、打ち出しやすい部分があるのではないかと。

出入り自由なので、確かに難しいといってみたが、何かしらのデータでも、現場の実感でもいいので、「これだけ来ているんですよ、高校生が」みたいなことを皆さんが言えるような方策が取れるといいと思う。

(事務局)

いま明確な回答はできないが、考えさせていただきたい。

(委員)

美術館・図書館は太田高校や太田女子高校の通学路になっていて、駅前にあるのでたくさん利用していただいている。それで高校生に期待にするというもの1つの見方かと思うので、参考にさせていただければと思う。

視察団体の関係で令和4年度は建築関係3団体で43人と記載があるが、今度西複合施設ができる。平田さんの関係で、おそらく建築関係の視察がすごく両方に増えてくる。生え抜きの職員もいなくなってしまったので、視察に対応できる体制をあらかじめ整えておくのもいいかと思っている。

蔵書数で毎年蔵書は増えているが、図録が減っているのは何か理由があるのか。

(事務局)

図録に関しては場所に限りがあり、他のアート作品のところなどに持っていけるものを整理した。元々図録にあったもの、例えば歴史資料館の歴史の関係のものを歴史に持っていったり、絵本作家で本で出版されたような図録は絵本のところに持っていったり、という整理を行った結果、すこし減少している状態になっている。

議題② 令和6年度事業計画について

事務局が資料2、資料3に基づき説明を行った。

(委員)

世界のバリアフリー児童図書展の件について、私は以前は目の不自由な方とか、四肢が不自由など、身体的な障害に目を向けることが多かったが、いま世の中のお母さんたちは、発達障害のお子さんの悩みがものすごく多い。親御さんは5年10年と本当に頑張って子育てをしてきているのだけれども、なかなか思うようにいかないという現実がある。特支のお子さんの親御さんにも、知的の面だけではなく、情緒障害の悩みも多い。

だから、この図書展の中には、情緒障害のお子さんのための本の紹介もあるのかとても興味がある。もしそういうものがあるのだとしたら、各所で発信して、ここに来てもらって、子どもたちが多少うるさくしても大丈夫にするとかできるのではないかと。普通の展覧会では静かにお行儀よく見なければいけないが、なかなかそれがうまくいかない人たちもいる。でも、そうした子たちには本がすごく必要だろうなと思っている。そういう情緒のお子さんに関連する本はあるか。

(委員)

世界のバリアフリー児童図書展というのは、JBBYの本部である国際のIBBYが世界中から2年に1回集めている。障害のある子どもたちが楽しめる本、あるいは障害のある子どもたちを理解するための本というコンセプトで、世界中から集めた中から選書した40冊なので、正直その年の40冊を開けてみないと、どういう本が選ばれているかというのはわからない。ただ、IBBYという団体が障害のある子どもと定義してるわけではないけれど、それは視覚だけではない、情緒の問題だとか、手が悪いから本をめくれないとか、そういうあらゆる障害を対象に考えている。全体を網羅しているというコンセプトは元々ある。ただ、2年に1回選んだ時に、どういう本が実際に選ばれてくるかはわからないので、その辺はいろいろな写真集とか、絵本とかがたくさん集まっている会場でやる時に、大いに膨らませてやっていただければいいなと思う。

ちょうど先日、長いこと世界バリアフリー児童図書展の日本の展示会の実行委員長をしていた人の講座を私どもで行ったけれど、まだまだ「知的障害がある子どもには赤ちゃん絵本を与えればいい」みたいな、そういう考えを悪気なく思っている人がすごく多い。障害があったとしてもティーンエイジャーにはティーンエイジャーの、人生を生きてきた歴史があるわけで、その年齢の子どもにあっている、かつその子が理解しやすい本を選んであげることが一番大事。高校生の子どもに赤ちゃん絵本を与えればいいじゃないかっていう考え方をとにかくやめて、続けていていただきたいなと思う。写真集はすごくいいみたいなので、今年度の40冊に写真集はそんなにないかもかもしれないけれども、この図書館だったら出せるものがたくさんあると思う。その辺はぜひいろいろ企画検討して、展示会を膨らませていただけるといいなと思っている。

(委員)

いまのことに関連して、6、7年前だったと思うが、武蔵野美術大学芸術文化学科でもバリアフリー図書をお貸しいただいて、ゼミの学生が展示会を作るという形で、大学の中であまり広くない場所だったが、展示会をさせていただいた。私たちとしては、美大で学ぶ学生たちに「幅広い人たちに向けて表現を届けるといえることがわかっていますか」ということを伝えたいという思いがまずあった。もちろん本に興味がある学生も多いので、大学内からもたくさん来たが、プレスリリースを打ってDMも作って各所にお送りし、メディアへのアピールも非常によく、学外からも見に来てくださった。今回の件に関しても、広報がすごく大切だなと思う。

このバリアフリー展は期間が短く、また、皆さんすごく忙しいと思うが、いま先生がおっしゃるようには実はすごくポテンシャルが高い企画。これについての運営と広報の体制がどうなっているのかとか、どの展示室を使うのかを伺いたいなと思った。

(事務局)

昨年度は美術展がやっていない期間に展示室1、一番広いところで行った。冊数も40冊程度だったが、イベント、車椅子体験を常設の展示で行った。あとは手話のDVDを上映したり、音楽でバリアフリーということで、演奏で障害を持っている方も楽しんでいただけるように演奏会等を開いた。実際に参加していただけたかということ、お1人2人いらっしゃるような形だった。

広報の方は美術展には全然及ばないが、2万枚のチラシを作成した。ポスターと小学生に1人ずつ、中学校とかにも何枚か配って、あと県の特別支援の学校にも1人1枚ずつ配った。実際に短い期間だが、何名か見に来てくださることもある。ただ、期間が2週間と短いので、その年その年で来場者数が多かったり少なかったりする。

(委員)

いま美術館・図書館のInstagramとX(旧Twitter)を拝見したけれども、まあまあ数のフォロワーがいらっしゃる。チラシも強いものだけれども、いまはSNSの方が、特に若いお母さんたちには多分訴求力が高い部分もあると思う。前はSNSの発信をどのくらい行ったのか。

(事務局)

図書の方はInstagramが使えない状態なので、前はXとFacebook、あとホームページ等で、それぞれイベントを開催する時は事前に告知や募集をした。

(委員)

Instagramは太田市美術館・図書館となっているが。

(事務局)

アカウントはあるけれども、今のところ美術部門の専用となっている。

(委員)

それはなぜか。正直、私の感触だと、美術館より図書館の方が人を引っ張ってくることができる。図書館が Instagram を使えないというのは、今日のいままで知らなかったの、すこしばかりした。

(事務局)

Instagram のアカウントを開設時に展覧会の広報用として立ち上げた経緯があって、運営をするのもやり方がわかってる職員は限られていたりするので、現状美術だけで使っている。ただ、それは絶対ではないので、今後検討していきたい。

(委員)

どこからか横やりが入ってくるかもしれないので、図書館も発信できるようにしておきたい。予防としてどんどん手を打っておかないと。ガンガン投稿しろということではない。こういったバリアフリーみたいな短い期間のものでも、SNS であれば、特に広報にお金がかからない。太田市の投稿の際のチェック体制がわからないが、館長決裁がいるということになると結構ハードルが上がるかなと思う。真面目な話、結構重要だが、その辺はどうか。

(事務局)

SNS の重要性については認識している。職員には SNS を活用していきなさいと言っているの、決裁のハードルが高いということは一切ない。どんどんやっていきたいと思う。

(委員)

一応お伝えしておく、学生、高校生には X は嫌いという人が増えている。悪口を言ったり、炎上するようなメディアということで、よくないメディアだという認識が結構伝わっている。私たちは Instagram を使います、と高大生にはよく言われる。

バリアフリーの本は、造本にすごい工夫がされているので、こんなふうになってるみたいなのところを、本を開いて動画でちょっとだけでも見せてあげる、などを、これまで行ってきた広報にプラスするなど。先ほど先生もおっしゃられていたが、保育園とか幼稚園とか、それから助産院とか、もっと低年齢から内的障害とか発達障害に関して関心持たれている方がいらっしやると思う。また、このバリアフリー絵本展は、ほとんどお金をかけないでできる、貸出料がすごく安いことを皆さんご存知か。

(委員)

さきほど申し上げたように世界を回っているの、日本国内で借りられる期間というのは 2 年間の内 1 年間しかない。期間限定になってしまう。けれども、44,000 円プラス送料実費だけですべてのセットをお貸しできる。ちなみにキャプションには全部点字のポチポチがついているし、あと目の音声をポチってやるとキャプションを読み上げてくれるセットも全部ついている。点数としては本 40 冊、キャプションとカタログが全部ついて 44,000 円。なので図書館に限らず、学校とかいろいろなところでも、ぜひ回して触れていただきたいものになっている。日本には 1 年間しか存在しない本たちなので、無駄にしないように上手に回っていくといいなと思っている。ぜひ使ってください。

(委員)

武蔵野美術大学でもまた借りたいのだけど、手を上げ損ねたりとか、こちらの体勢が整っておらず、なかなか借りられていない。けれども本当に常にお借りしたいと思っているくらい、コンテンツとしてのクオリティが非常に高い。これだけお金がかからないでお借りできるのは、JBBY と IBBY のおかげだし、実は待っている人や借りられなかった人とかもたくさんいる。なので、せっかく借りることになった場合は、使い倒すと云ったら失礼だけれど、図書館はぜひこの機会に Instagram を使って広報をしていただきたいと思った。

(委員)

さきほど報告していただいて、当事者の数をすごく気にしてくださっていたと思うけれども、当事

者がどれだけたくさん来るかよりは、やはり学校の先生とか図書館員とか、さきほど先生がおっしゃったように、保育士さんとか子どもに接する大人の人たちに、どんな本があってどういう見せ方・伝え方をしたらいいのかとかを学んでいただきたいというのがメイン。広報先もそういうことを意識していただけるといいと思う。

需要が増えて、海外の本でこんな工夫があるっていうことを日本に知らせるのが目的。日本国内で需要があれば、同じようなノウハウを使った日本の本を出版社が出してくれるようになる。そうして普及していくことが一番の目的だと思っているので、各界の方たちがそれにご協力していただくと大変嬉しい。

(事務局)

SNSの発信の仕方についていろいろアドバイスをいただいた。こちらも研究しながら、どういった方法が一番効果的なのか、どこをターゲットにしたら効果的なのかというところを、工夫してやっていきたいと思う。

(委員)

図書部門で昨年独自の企画を2つくらいしているが、来年度もそのような独自のものを行う考えはあるか。

(事務局)

図書で担当するイベントについて、昨年度分から資料に連番を振っていて1から10ある。その中で独自イベントがバリアフリーも含めると4つある。そのうち2つが今年ご報告させていただいた、てるてる坊主を作るものと救急の日だった。

昨年度は、例えばトートバッグを作る、要は本を借りる時に使うバッグを作るとか、美術館と併設している複合施設なので何かものを作るとか、そういうものを考えたり、図書の利用につながるようなものを、その時の担当職員が考えて行うイベントが2つあった。

そのほかにもう1つが昨年度から行っている朗読会。今年もつい先日終わったが、劇団民芸の劇団員の方に当館の本を朗読していただくというイベントを昨年と今年で2回行った。お子さんから60代70代の方まで参加された。今年は戦争の「二つの悲しみ」とか、宮沢賢治の「度十公園林」、谷川俊太郎の詩を読んでいただいた。

また、毎年世界の子どもの本展と世界のバリアフリーを隔年で行っているが、その中で本を展示するのに本当に安い値段で貸していただいている。そこに当館の予算をプラスをして、広報活動と一緒に行える2週間の常設をしている。バリアフリーであれば、昨年度は車椅子の体験。その前はちょっと重りをつけた状態で、つけたものにつけてないものを負荷がある時とない時で差がつくように釣りを体験していただいたりとか、テーマに沿った形で常設のイベントと単発のイベントをその機会に盛り込むように、その都度担当した職員が案を出してやっている。なので、例えばトートバッグとかは1回ノウハウができれば、実は何回でもやろうと思えばできるイベントだけれども、いろいろ毎年新しいことを考えて、図書館の利用、美術館の利用につながるようなイベントを図書で行っている。

(委員)

これから予算取りだろうからそのあたりは頑張ってもらって、この前群馬クレインサンダーズとコラボしたけれども、利用できるものは利用していただければと思う。

議題③ その他

(委員)

赤ちゃんのプログラムで、2回やらせていただいたけれども、その後引き続いてやっていただいている本当にありがたいというか嬉しいなと思っている。アンケートの言葉を見ても、続けていただいている意味が非常にあると思っている。

私も美術館の現場を知っているので、Instagramにしても、何もかも大変なのはもう十分わかっている。赤ちゃんのプログラムも小さなことだけれど、やるとなると大変で、サポートスタッフさんのこともあるし、いろいろな準備をされていることもよくわかっている。こうやって実行していただいていることで、太田の方たちの何人かがすごい喜ばれている。この赤ちゃんたちが20年後、具体的に2043

年に20歳、2041年には18歳で成人になる。その時に、赤ちゃんプログラムの体験はどうだったのか、というデータが取れたら、世界の中でも最先端の研究という状況だ。

すべての幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校でも同じことだと思うが、教育の成果、いわゆる美術館における教育活動の成果がどう出るのかというのは、すぐにはわからない。けれども、本当にぜひ続けていただけたらと思っていることを、感謝の気持ちとともにお伝えしたい。

今週末は長野県東御市に呼ばれて、赤ちゃんの鑑賞プログラムをしつつ、乳幼児から鑑賞を考える話し合いの会がある。東御市民にも、太田のことを伝えたいと思っている。

(事務局)

今年度も含めての話だが、開催回数について例年2回だったところを1回にさせていただきたいと考えている。方法としては前年度と今年度の報告ができる時期として、今くらいの時期であれば両方できるかなと思う。皆さんからご意見があれば伺いたい。

(委員)

今年度からか。

(事務局)

はい。事務局の方も事務量が増えていて、日程調整から始まって、資料作りが厳しくなってきたところ。また開館から7年経過しているのも、いろいろ軌道に乗ってきた部分はあると思っている。その中で皆さんに助言いただいていることは、全部蓄積されており、すぐにはできないことも、以前のを読み返して参考にしているので、何年か後に反映できるようなことも出てくると思う。そのようなことで開催を1回でお願いさせていただきたい。

(委員)

1回は反対ではないが、時期的にこの時期と考えていいのか。

(事務局)

来年度のことをお話することが重要だと思うので、来年度のことがある程度お話しできる時期となると今くらいと考えている。

(委員)

今日の来年度事業の案を聞いていると、まだ煮詰めている最中で、予算要求するには情報が少なすぎるかなと聞いていて思ったので、もうすこし後でもいいのかなという気がした。

(事務局)

考え方になるが、もちろん後にすることもできる。皆さんのご意見を聞きながら事業案の見直しができるような段階と考えると今くらいかなと思う。内容が固まった時期であればもうすこし後になる。時期の方は再検討とさせていただきたい。

(委員)

数年1回でやってみて、様子を検証したらいいかなと思う。他のところで評価委員をしていて2回を1回にしたところがあって、そこは指定管理者が入っていたところもあり、今一步になってしまったので、それは1回評価にしたからじゃないかという話があった。そこと太田は状況が違うし、事務量が多いのはそうだろうと常に思っているので、1回にされて、3年くらいやってみて検証したらどうか。

(事務局)

我々もやってみないとわからないところがある。そのあたりも皆さんから1回でどうだったか評価いただきたいと思う。その結果によっては、2回に戻すことも考えていきたい。

4. 閉会